

佛教研究における漢譯佛典の有用性

榎本文雄
(大阪大學)

佛教を研究するに際し、中國佛教を始めとした東アジア佛教の分野では、漢文佛典は一次資料となる。では、インド語文獻が一次資料となるインド佛教の研究に際して、漢譯佛典は如何なる有用性を有するのか。この點に關して考えられるものを列擧すると、以下のようなになる。

1. インド語原典もチベット譯なども現存しないテキストの場合、漢譯佛典は現存する唯一の **version** として不可欠な資料である。
2. インド語原典が現存するテキストでも、それと異なる **version** を提示する場合、現存するインド語テキストよりも古い **version** であることが多く、漢譯佛典は貴重である。
3. インド語原典が現存し、それと同じ **version** の場合でも、漢譯佛典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である。
4. 漢譯佛典の譯出に關する記録から、そのテキストのインドにおける成立年代の下限などの重要な情報が得られる。

本發表では、これらの諸點が孕む問題點や新たな研究の可能性について、原文を擧げつつ検討してみたい。

榎本文雄 ENOMOTO Fumio

1954年生

大阪大學大學院文學研究科教授 文學博士 (京都大學)

主要著作 “‘Mūlasarvāstivāda’ and ‘Sarvāstivāda’”
“Sanskrit Fragments from the *Saṃgītanipāta of the
Samyuktāgama” *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen
Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen III*
(co-author) 「初期佛教思想の生成 — 北傳阿含の成立」 「初期佛典における āsrava (漏)」 ほか多数。